

龍谷大学世界仏教文化研究センター
2016年度臨床宗教師特別講義

講演名	スピリチュアルケア
開催日時	2016年6月22日(月) 13:15~14:45
場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館 B101 教室
講演者	谷山洋三先生 (東北大学大学院文学研究科 実践宗教学寄付講座准教授)
司会	鍋島直樹先生(龍谷大学 文学部教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	60人

【講義の概要】

1. はじめに
2. 全人的痛み
3. スピリチュアルケアと宗教的ケア
4. ケアの基本
5. まとめ

【講義のポイント】

■はじめに

スピリチュアルケアの3つの特徴を講演者の自説として紹介した。

- ① スピリチュアルケアとは意図せずに提供されることがある。
- ② どのような行為でも愛(慈悲)があればスピリチュアルケアになり得る。
- ③ スピリチュアルケアを意識して提供する場合には、自分の無力を受け入れることが大切。

■全人的痛み

その上で全人的痛みとして理解される「トータルペイン」と「スピリチュアルペイン」は異なるものであることを指摘し、

身体的<精神的<社会的<スピリチュアル

上記のように痛みの段階が存在するという。また、最も深い痛みであるスピリチュアルペインには生きる意味・目的の喪失や、苦難に価値があるのかなど簡単に答えを見出すことのできない痛みが伴う。しかし、そういった痛みを持つクライアントとは、受容からコミュニケーションが始まるものであり、気持ちを引き出すという態度で接してはならないことを受講生に注意された。

■スピリチュアルケアと宗教的ケア

まず「傾聴」から全てのケアはスタートする。スピリチュアルペインに対応するのがスピリチュアルケアであり、その源流はキリスト教の pastoral care にある。そして、pastoral care から宗教色を省いたものが宗教的ケアという構図が描き出せる。つまり、次のような定義付けが可能となる。

- スピリチュアルケア：誰かに話を聞いてもらって、自分の思いを確認する
- 宗教的ケア：決断を神仏に委ねる

■ケアの基本

あるがままに聴き、価値判断をしないことが重要である。日本人は、気持ちを表現する、説明することが下手なので、支持→明確化→対峙の順でアプローチしていくことが肝心であると述べられた。

また、ケアの根本の心構えとして、知っておくべきことは、信徒と宗教者は宗教者にとってホーム（権威者としての役割を期待される）であり、公共空間において、相談者と臨床宗教師はアウェイであるということ。誰でも相談に乗れるというホーム感覚を持ったままでは、公共空間というアウェイの場で通用しないということ。

【まとめ】

東北大学が主宰する臨床宗教師研修の指導的な立場に関わってきた谷山氏は、「宗教的ケア」と「スピリチュアルケア」の違いを明確に示された。まず、自分が無力であることを認識することの重要性。あとは、価値観の押し付けがないかなど、反省を促すような講義が中心だった。

やもすれば、宗教者として立派に振る舞う人が、多くの人を傷つけるような矛盾した状況を生み出しているということにも注意され、その点に自覚的であることが、これからの臨床宗教師に求められる素養であることを指摘された。

講義の後には、龍谷大学臨床宗教師研修のアドバイザーとして連結する実習を行った。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究博士研究員 金澤豊